書評論文「アジアの多文化社会と国民国家」
『植民地支配の歴史を越えてー未来への投企としてのフィリピン・ナショナリズムー』

はじめに

今回書評論文を書くにあたって、人文書院から 1998 年に発行された「アジアの多文化社と国民国家」の中から、清水展が書いた「植民地支配の歴史を越えてー未来への投企としてのフィリピン・ナショナリズムー」を選んだ。この論文を選んだ動機は、フィリピンが過去にスペイン、アメリカの植民地支配を受け、その中でどのような政治的、文化的な影響を受け、それが現在のフィリピンにどう影響しているのかに興味をもったからである。本書は、この疑問に明確に筆者の意見を提示しているものであった。

筆者はまず、１．はじめに、２．スペイン支配の空間として、３．アメリカの影のもとで、４．文化の混血性と「未完の革命」、５．おわりに、という段落分けを行っている。そこで、この論文を書評するに当たり、段落ごとに書評していきたい。内容はまず、各段落の要約をする。次に、何が問題とされており、どのような方法でこの問題について考えているのか分析する。そのとき、問題発見に至った動機、また資料はどこから引用したのかなどにも適宜触れたい。次に、筆者がどのように結論を出しているのか分析する。最後にどのように議論が展開されているか分析する。ここまで分析し終わった時点で、私の考えるところを述べたい。以上のような内容を含め、この書評論文を書き進めていきたい。

１．はじめに

私たちがフィリピンと呼んでいるものはスペイン、アメリカ、日本の支配の結果できあがったもので、フィリピン人になるために現在進行形で途上している。フィリピンは植民地支配によって独自の内在的発展を妨げられた一方、もたらされたキリスト教、英語はアイデンティティーの重要な核となっている。フィリピンナショナリズムは未来を渇望する形で表れる。以上ここまでが要約である。

ここでは、フィリピンのアイデンティティーとナショナリズムが問題となっている。ここで筆者は、フィリピンは 385 年に及ぶ植民地支配の歴史をもっていることに注目し、アイデンティティーとナショナリズムを問題としたのであろう。

議論は、まず、フィリピンの歴史は、外部勢力の支配と洗脳(スペインによるカトリック布教とアメリカによる英語教育)、抑圧と搾取によって独自の内在的な発展を妨げられ、可能性を奪い取られた、いわば痛恨の過去としてあると認識するところから始まっている。その後、「しかし」という逆接の後で、キリスト教と英語とが、近隣アジア諸国との差異と誇りの徴として、フィリピン人のアイデンティティーの重要な核となっており、植民地支配の歴史を全面的に否定することはできないと言っている。この後で、歴史に回帰せず、また否定もせず、痛恨のままに歴史を受け入れざるを得ないゆえに、フィリピンにおけるナショナリズムは過去に回帰するよりも未来を渇望する形で表れると結論を提示している。

筆者が逆接をうまく利用し、植民地支配をマイナスのものと捉えず、その利益とも言うべきところを指摘し、結論で双方を掛け合わせ自論を提示している点は、筆者の視点を大きく評価する。特に、キリスト教と英語が近隣アジア諸国との差異と誇りとしてフィリピンにあるという視点に共感した。先進国の文化を早くに受け入れたということで、先進国に一歩近づいたという認識から、差異と誇りを感じるのであろう。しかし、これは筆者も言っているように、支配国からの強制であったことを忘れてはならない。プラスの面だけを評価してしまうと、あたかも植民地支配を正統化しているようにもとれてしまうが、実際これによりフィリピンの独自的な発展は妨げられてしまったのであるから、プラス評価だけをしてしまってはいけない。今後、筆者がこの点をどう評価していくのか読みどころである。

２．スペイン支配の空間として

16 世紀のフィリピンは、親族関係を基盤とした奴隷を含む身分制秩序によって村落が地域的な連合を築き始める段階にあった。スペインの殖民支配によって土着社会の発展方向は阻止され歪められた。近年に発見されたラグナ銅版は、フィリピンがアジア社会イの辺境に位置する閉ざされた地域ではなかったことを示している。ラグナ銅版の内容から、当時慣習法に基づいて十全に機能する行政機関が存在していたこと、タガログ語ムラユ語の深い関係、マニラとバイ湖周辺が東南アジア各地と密接な関係を有してたことが示された。スペイン支配以前の歴史の豊かさを回復することがフィリピンのナショナリズムを表現する可能性を生み出してゆく。(確かにスペイン支配以前には独自の文化が存在していたはずであるから、この時期の歴史を回復させることがフィリピンナショナリズムの構築に大きく寄与するであろう。)スペインの征服と支配の元で、フィリピンという政治空間が初めて成立し出現した。スペイン人が民族集団を弁別分類し、その言語や風俗習慣を異なったものとして記録することにより初めて個別の集団として客観的に存在するようになった。(個別の民族の集団は、差異の認識によって生まれる。)フィリピン人という概念は、なおさら新しく、19 世紀半ば以降の、民族意識の覚醒とともに生まれてきた。300 年を越えるスペインの殖民支配が、まさにフィリピンという国の形を生み出したが、ここで資源を見出すことができなかったため、フィリピンに住むスペイン人は数千人にとどまった。(やはり、金銀や香辛料などの資源の発見が植民地にする第一の目的であるからフィリピンのようにあまり資源のない地域は、すぐに関心を失わされてしまう。)スペイン人が集住するマニラ以外の地方では、行政単位の町がそのまま協会組織の教区と重なり合い、スペイン人の司祭が政治・行政に深く関与した。以上ここまでが要約である。

ここで問題となっているのは、フィリピンのナショナリズムの構築である。この章では、スペインの支配がフィリピンに及んだことを含めて、そこからナショナリズムについて考察している。

議論は、まず、16 世紀に親族関係を基盤とした地域的連合が成立し始めていたことを指

摘し、その土着の発展がスペインの植民地支配によって阻止されたという展開になっている。これを踏まえて、スペイン支配以前の歴史を豊かさを回復することがフィリピンのナショナリズムを表現する可能性を生み出していくと結論づけている。根拠として、スペイン支配以前には独自の文化が存在していたはずであるから、この時期の歴史を回復させることがフィリピンナショナリズムの構築に大きく寄与するであろうということを上げている。

筆者のこの見解に対しては疑問を感じる。スペイン支配がフィリピンに及んだ時点 16 世紀ごろ、多くの人々がこれを悪と据えていたのであるならば、16 世紀に考えるナショナリズムは、筆者がここでいっているように、スペインの支配以前の歴史の豊かさを回復するところに見出せるであろう。しかし、現在この 21 世紀にフィリピンのナショナリズムを考える場合、スペインの支配を悪としてではなく、肯定的に良い面も見出せるようになったのであるから、スペイン支配を排除して、なおかつその支配以前にまでナショナリズムをもとめてさかのぼるのは賛成できない。このスペインの支配のプラス面をも含めてナショナリズムを考えるべきであると思う。

３．アメリカの影のもとで

アメリカは、スペイン末期から続く革命と民衆の根強い抵抗を鎮圧するために、フィリピン人エリート層と妥協し、彼らに一定の自治を認めた。植民支配の結果として「国家なき議会政とエリート支配」というフィリピン政治の特徴が形成された。アメリカのフィリピン統治の名分は、「友愛的同化」と「自治の教育」にあった。アメリカからの独立を約束されていたフィリピンにとって、日本軍に撃退されたアメリカ軍の再侵攻は、まさしく解放であり、独立付与の約束の履行であった。アメリカ支配からの独立が与えられたことによりアメリカとの密接な関係、アメリカへの依存・従属の関係が戦後も続いた。抗日人民軍は農地解放を求めて強力な運動を展開したが、アメリカの支援を受けた大統領により急速に鎮圧された。東西冷戦の深刻化とともに、社会主義に対して民主・自由主義の優位を宣伝するショーウインドウの役割を与えられ、援助と干渉を受け続けた。民主主義の実態は、各地方ごとに土地資産を基盤とした有力家族が政治経済を掌握し、そうした地方エリートの連合体としての二大政党制だった。1935 年の代議員会議で国民の自由意志により採択され、一般国民投票で批准された憲法の枠組みに基づき、定期的に実施された選挙が正当性に保証した。マルコス大統領は、戒厳令体制により大統領自身が唯一のスーパー・パトロンとなって国家さえも私物化しようとした。戒厳令の直後、新憲法を批准させ、戒厳令による強権体制「立憲権威主義」と呼び憲法の枠内だと正当化し続けた。戒厳令体制派 70 年代を通じて 6－7%の持続的な経済成長率を達成したが、数年のうちに矛盾と限界を露呈し始めた。戒厳令体制の矛盾が一気に表面化してくるのは 1979 年の第二次オイル・ショックからで、1983 年のアキノ暗殺以後、経済成長率は 4－5%のマイナス成長となった。マルコス政権に対する反発から、真の民主主義の回復を求めて、国民はデモや集会を繰り返した。こうした経済と政治の両面における絶

対的な危機が、それまで政治とのかかわりを慎重に避けていた中産階級の人々を、街頭やデモや集会へ、政治への直接的な関与へと駆り立てていった。マニラ市民がヒューマン・バリケードを築いて青年将校らをマルコス派の攻撃から守った二月革命は大きな衝撃を与えた。二月革命の連鎖が最終的に東欧とソビエトの社会主義体制を崩壊させ、東西冷戦の終結をもたらしたという意味でこれは画期となる出来事である。民主主義の回復とともに、米軍基地の完全撤廃はアキノ政権下の特筆すべき達成である。以上ここまでが要約である。

ここで問題となっているのは、アメリカのフィリピン統治、フィリピンの民主・自由主義と戒厳令体制の矛盾と二月革命である。特に問題となっているのは、冷戦の深刻化に伴い、フィリピンは民主・自由主義の優位を宣伝するショーウィンドウの役割を与えられたが、マルコス大統領の戒厳令後、その矛盾に対して真の民主主義を求めてマニラ市民がヒューマン・バリケードを築き二月革命を引き起こしたことである。なぜここに筆者が注目したかというと、要約にも書いたとおり、この二月革命の連鎖が最終的に東欧とソビエトの社会主義体制を崩壊させ、東西冷戦の終結をもたらしたからであろう。

議論の展開は、まず、アメリカの植民地支配について述べ、その支配からの独立後、民主・自由主義が活発化してきたことに触れ、マルコス大統領の登場により戒厳令体制がとられ、その矛盾が露呈し始め、市民による二月革命に至ったという展開である。途中に、マルコス大統領の戒厳令体制下での矛盾に関して経済成長率が 4－5%へとマイナス成長になったことにも触れていた。これはこのマルコスの政治を批判するためにこのような細かい数字を提示したのであろう。したがってこの問題をこの章で筆者は強調したかったのであろう。

以上のような議論展開の後、筆者は以下のような結論を出している。マルコス政権に対する反発から、市民は真の民主主義を求めて立ち上がり二月革命を起こし、この連鎖が最終的に東欧とソビエトの社会主義体制を崩壊させ、東西冷戦の終結をもたらした。

この章で筆者は実に説得的で分かりやすい文章の書き方をしている。上記の結論に説得性をもたせるため、まず、アメリカの植民地支配からの独立について触れ、そこから民主主義を市民が支持し国内に根づいていったという歴史を踏まえたうえで、具体的にマルコス政権下の矛盾を経済成長率に注目し数字まで提示した。これにより二月革命がどのような背景の上で起きたかを読者に論理的にまた説得的に説明している。このように段階を踏み、具体的な数字を出すとより説得的な文章となる。

４．文化の混血性と「未完の革命」

16 世紀にスペインの殖民支配によって地理的な外縁を与えられたフィリピンは、その内側に囲い込んだ人々をフィリピン国民という文化共同体として内発的に発展していくようなナショナリズム発揚のための文化資本を欠いていた。フィリピンの文化や社会を語るとき、その実体や本質を問うことは、文化的な基盤が弱く、国家を支える伝統もないので、有効なことではない。伝統、民族、国家や未開社会などが近代のある時点で発明・創造された観念であり、それを行う主体の政治的な優位性を確認するものである事を我々は認知している。

フィリピンの文化の重層性や多元的な並存は、フィリピン人側の未消化やうわべだけの摂取という意味で常にマイナスの意味で語られてきた。しかし、スペイン・アメリカからのものにしろ、それはあるコンテクストの中ではまさにフィリピン的なるもののエッセンスとして作用し、そのようなものとして当人に自覚されてきた。スペイン・アメリカから伝えられた文化や政治は、外来のものでありながら、まぎれもなくフィリピン化しフィリピン的なるものの一部を形成している。外来の文化を内に受け入れ、まさに自己そのものの一部としていくダイナミックで柔軟な変化生成としてフィリピン文化は作られてきたのである。外来との接触・変容は必ずしも対等な関係のもとで平和的に生起したものではなかった。外来のものに対する反発・抵抗・搾取という緊張関係の中で継続したのである。レナト・コンスタンティーノは、フィリピン人は歴史全体を通して四たび「解放」される不幸にあったと指摘する。フィリピンが本来あるべき姿とは異なっている現在にあるという認識は、あるべき姿の回復の希求へと人を駆り立てる。「未完の革命」の不断の希求という姿勢はアキノ政権下の新憲法にもよく表れている。それは、現存するフィリピン諸言語の一層の発展をうたったものである。ラモス大統領がかつてその選挙キャンペーンのスローガンで「エドサ・92」を用いたことも「未完の革命」を志向する精神の発露である。ラモス大統領は「未完の革命」を未来へと投げかけることによって政権の正統性を強化しようとした。以上ここまでが要約である。

ここで問題となっているのは、フィリピン文化についてである。ここで筆者がフィリピン文化を問題としたのは、フィリピンの文化について考えるとき、どうしてもスペイン、アメリカの支配中に受けた文化の影響を見逃すことができないと考え、フィリピン文化の混血性に注目したからであろう。

議論の展開は、以下の通りである。スペインの植民支配によって地理的な外縁を与えられたフィリピンは、その内側に囲い込んだ人々をフィリピン国民として内発的に発展していくようなナショナリズム発揚のための文化資本を欠いており、文化的な基盤が弱く、国家を支える伝統もないと、文化の重層性や多元的な並存は、フィリピン人側の未消化やうわべだけの摂取という意味で常にマイナスの意味で語られてきたと、まず、以前までの議論を紹介している。そのうえで、次に逆接のしかしでつなぎ、自論を提示している。筆者は、スペイン・アメリカからのものにしろ、それはあるコンテクストの中ではまさにフィリピン的なるもののエッセンスとして作用し、外来のものでありながら、まぎれもなくフィリピン化しフィリピン的なるものの一部を形成していると述べている。

そして、最後に、外来の文化を内に受け入れ、まさに自己そのものの一部としていくダイナミックで柔軟な変化生成としてフィリピン文化は作られてきたのであると結論付けている。

ここでの筆者の書き方に注目したい。ここではまず、今までフィリピン文化についてマイナスの意味を持って語られてきたことを紹介し、つぎにこれをひっくり返す形で自論を提示し強調している。この、今までの議論を述べてからそれも踏まえて自分の意見を述べるという説得的な議論展開を大きく評価したい。自分の意見を人に聞いてもらうとき、自分の意見

を述べるだけではなかなか説得あるようには話せない。他の意見も述べそれも踏まえて、しかし私はこう思うというようにして始めて説得的に話せるのである。文章を書く上でもこのことは当てはまるであろう。

５．おわりに

過去ではなく未来へ、定着・不変ではなく移動・変化へと世界を新しく見直そうという試みが活発になっている。しかし、無批評でクレオール性を称賛するだけでは、弱者や貧者を抑圧するような現状のシステムの追認と固定化に益するだけに終わりかねない。豊かでより良い生活を保証する社会へと変化していくことを一般大衆は希求し、インテリや言論人は「未完の革命」の達成を夢想する形でのフィリピンのアイデンティティーを模索している。以上ここまでが要約である。

問題となっているのは、ハイブリットな文化の生成である。いままでの、フィリピンの文化の混血性の議論を踏まえて、この問題をここであげたのであろう。

議論展開は上の要約の通りであり、説明するまでもない。いままでの議論を踏まえた結論的なものになっている。

この章の内容は、今までの各章で筆者が主張してきたことをまとめた形で書かれており、今までの検討が十分に生かされた内容である。少々抽象的な記述であるようにも感じるが、このまとめではこのくらいの抽象性出した方が、すべての議論を包括するのでよいと思う。

おわりに

この「植民地支配の歴史をこえて」の論文では、題にそって、スペイン統治、アメリカ統治、独立後のフィリピンという歴史区分の形で章わけをしており、大変わかりやすいものであった。各章では今までの議論も検討したうえで、たくみに逆接を使い持論を提示しており説得的な文章であった。この論文は、歴史に焦点を当てたものであるため、章の区分がしやすかったが、今後ほかの論文でも歴史区分以外にどのように章分けするのか書評していきたい。